

抄注・北原白秋第一詩集『邪宗門』 誦彙

北原白秋の第一詩集『邪宗門』〔一九〇九〔明治四二〕・三易風社〕の中から（参考までに、再版〔一九一一〔明治四四〕・一一東雲堂書店〕の増補、改訂三版〔一九一六〔大正五〕・七同〕の「邪宗門拾遺」をも見る）、いくらかの注意される語を動詞、形容詞、形容動詞〔情態副詞を含む〕を中心に蜂矢真郷が拾い、それらについて各自が分担して述べる。

枠で囲んで示す白秋の詩の引用は、『白秋全集』1 詩集1〔一九八四・一二岩波書店〕による（ページ数もそれによる）。
担当者は、蜂矢真郷の他、岡崎友子・小川志乃・竹内史郎・林浩恵・蜂矢真弓である。

アヲナリ・アヲニ／トホニ

邪宗門秘曲

（略）

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしぼり、
腐れたる石の油に画くてふ麻利耶の像よ、
はた羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青なる仮名は
美しくしき、さいへ悲しき歓楽の音にかも満つる。

（略）

（14ページ）

桑名

（略）

一 狂念

悪の窓 断篇七種

（略）

夜となりぬ、神世に通ふやすらひに
早や門鎖す古伊勢の桑名の街は
路も狭に高き屋づくり音もなく、
陰森として物の隈ひろごるにほひ。
おほらかに零落の戸を瞰下して
愁ふるがごと月光は青に照せり。

（156ページ）

あはれ、はや、焼酎は醋とかはり、人は轢かれて、
盲ひつつ血に叫ぶ豹の声遠に泡立つ。

(125ページ)

工藤力男氏「上代形容詞語幹の用法について」(『日本語史の諸相
工藤力男論考選』「一九九九・八 汲古書院」、もと「国語国文」四
二一七「一九七三・七」)は、「ク活用形容詞の語幹が、単独で二語
尾をとることはない」と述べられる(氏は、シク活用形容詞語幹も
単独で二を伴うことがないことを合わせ指摘される)。

しかし、この指摘は「上代」についてのものであって、平安中期
頃には、マロシ・ユルシに対する

マロニ 沈をまろに削りたる貫實(宇津保物語・菊の宴)

ユルニ 花さそふ風ゆるに吹ける夕暮に(同・国譲下)

のように、「ク活用形容詞の語幹が、単独で二語尾をとる」例が個
別的に見えるようになる。さらに下って、室町時代の抄物には、チ
ヒサシに対する

チヒサナ 漢ハイカホト大キヤラウ小ナヤラウヲモ不_レ知ソ

(史記抄)

など、ク活用形容詞と形容動詞とが語幹を共通にする例が多く見え
て、チヒサナのナはニ・アリ・ナリの連体形ナルに由来するので、
この時代になると工藤氏の指摘は有効でない。

白秋の、アヲシに対するアヲニ・アヲナリや、トホシに対するト
ホニの例はその延長にあるものと言えよう。「単独に」ではなく接
頭語マ「真」・イヤ「弥」を上に伴った

マアヲニ あはた殿御いろもまあをにならせたまひて(大鏡)

イヤトホニ …いや遠に(伊也等保尔) 国を来離れ…(万葉四
三九八)

の例は上代・中古に見えるので、アヲニ・トホニは形成されやすい
ということあるいはあるであろうか。ただ、口語でアヲナ・トホナ
のように言う例は見当たらないので、これらは近代詩歌における文
語的な例ということになる。

(蜂矢真郷)

ウヅクム

嗅煙艸

『あはれ、あはれ、深江の嫗よ。

髪も頬も煙艸色なる、

棕櫚の根に蹲む嫗よ。

汝が持てる象牙の壺は

また薫る褐なる粉は

何ぞ。また、せちに鼻つけ

涙垂れ、あかき眼擦るは。』

(略)

(149ページ)

動詞の中には、以下のように「くまるくむ」のような対を持つ
ものが、少なからず見いだせる。

あたたまる(暖まる)―あたたむ、かがまる(屈まる)―かが

む、からまる（絡まる）——からむ、すくまる（竦まる）——すくむ、そまる（染まる）——そむ、つかまる——つかむ、ゆるまる（緩まる）——ゆるむ等

「蹲る」に関しても、「くまる——くむ」と意識されたため、「うづくまる——うづくむ（白秋では「うづくむ」）」のように用いられた可能性がある。

また更なる要因として「うづくまる」の他に、「腰を落とし、ひざを曲げた状態」を表すものに「かがむ（屈む）」「しやがむ」といった動詞がある（但し、これらの語は口語性が高いため、詩歌には用いられ難かったと考えられる）。これら語が「くむ」であるため、「うづくむ」の形が類推され易かったのではないかと考えられる。この「うづくむ」に関しては、以下のように白秋以外の近代詩歌にも用例が見られる。

「天鵝絨のにはひ」

やはらかに腐れつつゆく暗の室。

その片隅の薄あかり、背にうけて

天鵝絨の赤きふくらみうちかつぎ、

にほふともなく在るとなく、蹲み居れば。

（与謝野晶子『晶子詩編全集』實業之日本社・一九二九）

なお仮名遣いに関しては、「蹲 ウズクマル」（『類聚名義抄』図一〇六）等から「ウズクマル」の方が正しいと思われるが、近世には「お家久しき親仁肴入の番の為に独うづくまひてふしける」（『好色一代男』『西鶴集上』日本古典文学大系）のように「ウヅクマル」が見いだせる。

（岡崎友子）

オホシ「大」

魔国のたそがれ

うち曇る暗紅色の大きき日の

魔法の国に病ましげの笑して入れば、

もの甘き驢馬の鳴く音にもよほされ、

このもかものにも悩ましき吐息ぞおこる。

（略）

（37ページ）

オホシをめぐっては多くの先行研究がある。意味と形態の歴史の変遷についての指摘は諸氏の一致するところで、ここでは坪井美樹氏『日本語活用の体系の変遷』（笠間書院 二〇〇一）の指摘に沿って述べることにする。まず、上代ではオホシの連用形オホクは「多」の意味、連体修飾する連体形オホキは「大」の意味に限定されて用いられた。

さ寝る夜はおほくあれども（於保久安札杼毛）あれども物思はず安く寝る夜は実なきものを（万葉集一五・三七六〇）

大き海の（於保吉宇美能）水底深く思ひつつ裳引き平しし菅原の里（万葉集二〇・四四九一）

その後、連体形オホキからはオホキナリという形容動詞が生まれ、連用形オホクからはカリ活用のオホカリが生まれた。そして中古和文では「多」の意味を表す場合の終止形・連体形はカリ活用オホカ

リ・オホカルが用いられ、「大」の意味を表す場合はオホキナリが用いられた。

うるわしき、貝石など多かり（土左日記・二月四日）

武蔵の国と下つ総の国とのなかにいと大きな河あり（伊勢物語・第九段）

中世以降は「多」の意味の語としてオホシが用いられるようになり、一方でオホキナリからオホキイという形容詞が生まれた。オホキイの例が鎌倉時代に見られることは、辛島美絵氏及び山内洋一郎氏によつて指摘されている。

白秋のオホキの例は、連体用法で「大」の意味を表す点においては上代のオホシの使いわけに沿ったものである。しかし、一般にはオホキという語は「多き」を連想させる。それでもオホキを用いた背景には、オホキイに対するオホキシが歴史的に見られないことがあるだろう。「大」の意味を表す文語にはオホシあるいはオホキナリがあるが、オホキイと同じく形容詞であること、上代に「大」の意を表す例があることから、オホキの方を用いたものと思われる。

（林 浩恵）

オホラニ

納曾利

（略）

納曾利のなげき、ひとしなみ

おほらににほふ雅楽寮の古きいみじき日の愁

納曾利の舞の

人のゆめ、鈍くものうき足どりの裾ゆるらかに、

おもむろの振のみやびの舞あそび、

納曾利のなげき……

（略）

（55ページ）

ウェブ上で「おほら」を検索してみると、次の例が得られた。

・山澄むや肌もおほらに野天風呂（現代俳句協会による作品展・http://www.gendaihaiku.gr.jp/haikukai/result/19_jitan.htm）

・若きいのちは力あふれて歌ぞおほらに望みはるけし…

（大阪大学学生歌「立山澄夫作詞／吉本昌裕作曲」<http://www.geocities.co.jp/Athlete-Athene/3826/koka5.htm>）

右の例はいずれも、邪宗門よりも後のものとみてさしつかえがないように思われる。また管見では、邪宗門以前のオホラニ・オホラナリの例を見出すことができなかった。それでは、どのような事情により白秋はオホラニなる語を生み出したのであろうか。

まず注意したいのは、オホラカが文献上に存することである。

・御まへにかなまりに氷のおほらかに入りたるを御覧じて…（讃岐典侍日記）

・又の日、女のぼりて見るに、卒都婆に血のおほらにつきたれば…（宇治拾遺物語）

このオホラカという語は、蜂矢真郷氏「ラカ型語幹の構成」（『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』和泉書院、一九九九年）によれば、形容詞語幹を構成要素とする本来型のラカ型語幹と考えられ

る。すなわち、前項要素であるオホは形容詞語幹と見ることができ、「オホラ+カ」と分析できる。

さらには、次のような例も考慮したい。

・立てる人どもは、装束の清らなること、物にも似ず（竹取物語）

・…小金門にも悲しらに（物悲良尔）思へりし我が子の刀自を…（萬葉集・七二三）

これらは、形容詞語幹キヨ・カナシが接辞ヲを伴う例であり、これらに代表されるように接辞ラは一般に形容詞語幹に伴われる。

以上に基づく、形容詞語幹が接辞ヲを一般に伴う現象を背景に、既存のオホラカの力の脱落形としてオホラなる語を白秋は生み出したと考えられる。

（竹内史郎）

カアユシ

さならずば

わが家の

わが家の可愛ゆき鴿を

その雛を

汝せちに恋ふとしならば、

いでや子よ、

逃れよ、早も邪宗門外道の教、

かくてまた遠き祖より伝へこし秘密の聖蹟

とく柱より取りいでよ。もし、さならずば
（略）

（147ページ）

カアユシの古形カハユシの例は、古くは今昔物語集に見られる。

髪ノタソくトシテ可咲気ナルヲ見ニ、カハユク難為思へ共…
（今昔物語集巻第二六）

後にカハユシは語形が様々に変化する。まずハ行転呼により発音がカワユシとなる。発音に従ってハをワで表記することとして、形容詞語尾の変化などを考慮にいれた変化の過程は次のようになる。
カハユシ↓カワユシ↓カワユイ↓カワイ

カアユシ→カアユイ→カアイ

カワイイは史記抄の例が最も古いようであり、日葡辞書にはカワイイではなくカワイイが立項されている。

ケニカワイ、トテ半ラツ、カハレトテ…（史記抄卷一六）

Casati. カワイイ（日葡辞書）

カアイイの例は明治まで下るようだが、語尾イを省略したと思われるカアイの例が近世に見られる。

可愛とおもふおとこは…（斬本・当意即妙）

このような例は「いとし、かはいと締めて寝し」（曾根崎心中）とカワイイにも見られる。語幹末がイであることから語幹が終止形相当で用いられることがあったものかと思われる。

カワイイがカアイイと変化した背景には、カワイイが「愛らし」意を持つようになったことから「可愛」と表記されるようになる。

ったことがあると思われる。「可愛」はカアイと音読できるからである。また、それに加えてカワイイのワの部分をぞんざいに発音するとカアイイとなることも理由としてあげられよう。

カアユイの例は明治までくだる。

皆お前を可愛いと思へばこそだぞ。(江見水蔭「女房殺し」一

八九五年／『硯友社文学集』新日本古典文学大系明治編21)

カワユイとカアイイとの存在が、このような形を生み出したものであるうか。白秋の例も、文語カハユシと口語カアイイから形成された語形と言えるだろう。

(林 浩恵)

サミシラヤ

顔の印象 六篇

A 精舎

(略)

いづこにか薄日さし、きしりこきり斑鳩なげく
寂寥や、空の色なほ紅ににほひのこれど、
静かなる、はた孤独、山間の霧にうもれて
悔と夜のなげかひを懇に通夜し見まもる。

(略)

(95ページ)

形容詞語幹が接尾辞ヲを伴うことは、上代から見えて、さらにニ・ナリを伴い情態副詞・形容動詞として用いられる。シク活用形容詞語幹の場合は、上代・中古の例を挙げると、

モノガナシラニ … 小金門にもの悲しらに(物悲良尔)思へり

し我が子の刀自を…(万葉七二三)

ワビシラニ 秋の虫何侘びしらに(何侘芝良丹)こゑのする侍

みし影に露や漏り往く(新撰万葉集三七四)

サカシラニ さかしらに夏は人まねさゝのはのさやぐしもよを

わがひとりぬる(古今一〇四七)

のようであるが、サミシラニないしサビシラニ・サブシラニの例は見当たらない。そのような例としては、鎌倉時代に

モノサビシラニ やまかげやすそのをかけてすむいほのものさ

びしらにうづらなくなり(万代三一九六)

のような例が見えるが、些か珍しいものである。

近代の詩歌の例としては、

サブシラニ 下総の結城の小田の田雀は友うしなひてさぶしら

に啼く(正岡子規『竹乃里人』「一九五六〔昭和三一〕・一

一 岩波書店」、一九〇一「明治三四」年二月詠)

サビシラニ さびしらに蟬鳴く山の小坂には松葉ぞ散れるその

青松葉(長塚節、一九〇三「明治三七」年七月三〇日詠)

などがある。

これに対して、白秋の例は終助詞ヤを伴いサミシラヤとして用いられていて、右に挙げてきた例がゝニの形であるのと異なっている。今一つ、近代にはサビシラノの例が見える。

盃を含みて目を閉ぢて、／唯さびしらの物思ひ、／君よ涙のせ

かれずば、／火影にそむけ人知れず。(薄田泣菫『暮笛集』春夜「一八九九〔明治三二〕・一一 金尾文淵堂」)

この例は、白秋や子規・節の例より古いが、それらに影響を与えているかどうか明らかなではない。

(蜂矢真郷)

スズロカニ

納曾利

(略)

くりかへし、さはくりかへし、
ゆめのごと後に連る笙の節、
笛のねとりもすずろかに、
おなじことおなじ嫺にくりかへし、
舞へる思の
倦める思のにはやかさ、
ゆるき鞆鼓の
音もにぶく、
古き納曾利の舞をさめ……

(略)

(57ページ)

スズロの構成はトドロ等と同様、一音節語基重複に接尾辞ロが接続したものである。また、スズロには交替形としてソゾロ、ス

ゾロがある。スズロ・ソゾロ・スゾロは平安時代からみられる。

スズロ 湯 スゞロ (平・上濁・上の声点あり) (類聚名義抄観智院本)

ソゾロ この君のかくそゞろなる精進しやうじんをしておはするよ (蜻蛉日記)

スゾロ わが、かく、すぞろに、心弱よはきにつけても (源氏物語・蜻蛉)

また、ニが接続したスズロニの例も平安の早い時期からみえる。スズロニ むかし、おとこ、みちの國にすゞろに行きいたりにけり (伊勢物語、十四段)

スズロカニは古典には見られず、また、ソゾロカニ、スゾロカニの用例も確認できない。スズロと同じ一音節語基重複語にヤカ、ラカ、ロカを伴うものがあるが、これらはササ、ソソを語基として複合名詞、動詞をつくることができる。

ササヤカ 奥の方よりさゝやかなる女をゝし出でゝ (浜松中納言物語) —ササナミ

ソゾロカ (簞) 丈だちものものしうそぞろかにぞ見えたまひける (源氏物語、柏木) —ソソル、ソソリタツ

一方のスズロはスズロニ、スズロク、スズロアリキ、スズロサムシ等、接尾辞ロを落として語を形成する事はできない。つまり、スズロカニの構成は「スズロ+カ」+ニと考えられる。

近代詩歌には次の様に用いられている。

すずろかにクラリネットの鳴りやまぬ日の夕ぐれとなりにけるかな (北原白秋『桐の花』銀笛哀慕調、一九一三〔大正二年〕東雲堂書店、白秋全集六)

乗る人は なにを思ひて／すずろかに 馬車はゆくらん（三好達治『一点鐘』、海、馬車、一九四四〔昭和一九年〕、創元社、筑摩現代文学大系二三）

（小川志乃）

スユシ

濃霧

（略）

濃霧はそそぐ……さながらに戦く窓は
亜刺比亜の魔法の館の薄笑。
麻痺薬の酸ゆき香に日ねもす噎せて
聾したる、はた、盲ひたる円頂閣か、壁の中風。

（略）

（22ページ）

狂人の音楽

（略）

一人の酸ゆき音は飛びて怜羊となり、
ひとつは赤き顔ゑがき、笑ひわななく
音の恐怖……はた、ほのしろき髑髏舞……

（略）

空気は酸し……いま青し……黄に……なほ赤く……

（略）

（78・81ページ）

スユシは古くはスシという形で用いられた。

酢キ子ヲ拾ヒテ、弱キ身ヲ助ケ……（東大寺諷誦文稿）

スユシの古い例としては次の例がある。

食事の味ひすゆく思して（義残後覚 三・宇留山の城へ漠南押寄る事／『日本国語大辞典』第二版による）

スシは一音節語幹の形容詞であるが、一音節語幹の形容詞について、岩村恵美子氏に「二音節以上のものに比べて語の識別等において安定性を欠くと思われる」という指摘がある（「ナシ（甚）型形容詞——否定性接尾語を有する形容詞の考察——」（『語文』六四輯 一九九五）。『倭語類解』には「酸 sw-i-i.（原文はハングル表記）」とスイイの例があり、スイイもスユシも語の識別において安定を求めた例と言えるだろう。

さて、スユイの形成には、スイイの連用形ウ音便とそれに伴う拗長音の出現の影響が考えられる。スイイの連用形スイクは、ウ音便化するとスイウヴスユウという変化が推測される。スイイと同じく語幹末がイ列音の形容詞オホキイの連用形「Yogidu（大きう）」（日葡辞書）の例や、シク活用形容詞連用形「Canaxu（悲しう）」（同）の例などが参考になる。ウ音便によって生じたスユの部分語幹とし、そこから終止形を再構成したのがスユイであろう。

同じく一音節語幹の形容詞コシ（濃）に対して方言にコイイがあり（『日本国語大辞典』第二版）、同様にユが挿入されたコユシの例

があることも傍証となる。

色濃ゆき堇も潮岬かな（高浜虚子・一九三三年／『高浜虚子全集』第一一巻 改造社 一九三五）

一方で「腐つて酸っぱくなる」意のスウルという動詞があり（酢漿師説冷酢説比伊須由札流・和名類聚抄水漿部）、スウシ形成にはその影響もあるかもしれない。

また、白秋の出身地の南筑後では「酸味がある」ことをスイカあるいはスユカといい、「酸っぱくなる」ことはスユナルという。右記の理由の他、方言も影響を与えている可能性があるだろう。

（林 浩恵）

タユタシ

懶き島

（略）

行きぬれどものうし、波ののたくりも、

懈たゆたき砂もわが惱なやみものうければぞ、

信あはうどり天翁もそろもそろの吐息といきして

終日ひねもすうたふ挽歌もがりうたきくものうし。

（略）

（209ページ）

タユタシの例は管見の限り他に見られないが、似た意味を持つ形容詞にタユシがある。

都辺に君は去にしを誰が解けか我が紐の緒の結ふ手たゆきも
（結手懈毛）（万葉集一二・三一八三）

かたときにかへし夜数をかぞふれば鳴の諸羽もたゆしとぞなく
（蜻蛉日記 下・天禄三年閏二月）

タユタシを考える上で参考となるのが、接尾語タシである。館谷笑子氏「接尾語タシの成立過程——タシ型形容詞の考察から——」（『語文』六九輯 一九九七）では、接尾語タシが形容詞イタシから成立した過程を論証しているが、タシの上接部は時代を追って独立的要素から非独立的要素に変化するという。非独立的要素の一つに形容詞語幹があげられているが、「形容詞語幹＋タシ」の例は中世以降に見られるとのことである。次のオモタシの例は館谷氏の挙

例によるが、館谷氏は「虫めづる姫君」を鎌倉時代の例として扱っている。

ますますも重き馬荷に（重馬荷尔）表荷打つといふことのごと

：（万葉集五・八九七）

袋など、あくるだにあやしくおもたきかな。（堤中納言物語 虫めづる姫君）

タユタシはこのような例の延長上にあるもので、タユシの語幹タユに接尾語タシが接して構成されたと見られる。

ところで、オモシとオモタシの意味の相違について、館谷氏は「感覚を表す形容詞イタシに由来する接尾語タシが付くことによつて、実際の感覚を伴った重さを表したのがオモタシだ」としている。タシが接することで感覚的な意味が加わるという点が注意される。

また、イタシには連用形イタクに見られるような「程度が甚だし」意味もある。従つて、タユタシはタユシの「だるい」という感

覚の意味がより強まると見られる。白秋がタユタシを用いたのは、砂を「だるい」と見る物憂い心情を強調するためではないだろうか。

(林 浩恵)

タユラニ

入日の壁

(略)

あかあかと精舎しやうじやの入日。――

ややあれば大風琴おほオルガンの音の吐息といき

たゆらに嘆なげき、白蠟はくろうの盲しひゆく涙。――

壁のなかには埋うづもれて

眩暈めくるめき、素肌すはだに立てるわかうどが赤き幻まぼろし。

(略)

(114ページ)

タユラニ(あるいはタヨラニ)の例は、萬葉集の東歌に見える。

邪宗門より遡る例はこの二例に限られるようである。

・筑波嶺の岩もとどろに落つる水よにもたゆらに(多由良尔)我が思はなくに(萬葉集・三三九二)

・足柄の刀比の河内に出づる湯のよにもたよらに(多欲良尔)児ろが言はなくに(萬葉集・三三六八)

これら東歌の解釈については、宮川久美氏「タユラニ・タヨラニ」考(『萬葉』一七八号、二〇〇一年)が詳しく、次の三点が明

らかにされている。

・「筑波嶺の岩もとどろに落つる水」「足柄の刀比の河内に出づる湯の」等は、絶えることがないという意味の比喻である。

・タユラ・タヨラの語構成は、「語根タユ(絶) + 接辞ラ」と分析できる。

・語根タユは、「長く続いていたものが途中で続かなくなつて途切れる」という意味を表す。

宮川氏による上記の二首の解釈は、それぞれ「筑波嶺の岩をもとどろかして落ちる水が決して絶えることがないように、わたしも決して途中で途切れるような思いではないのに……」「足柄の土肥の河内に湧き出る湯が絶えることがないように、あの子も途中で途切れるような思いでいるようには言わないのに……」と述べられている。宮川氏の説は穏当かつ従うべきものであろう。

白秋が上記の二首にならい、タユラニを用いた可能性は大きいが、白秋の使用するタユラニには、「絶え絶えに」「とぎれとぎれに」といったニュアンスが認められる。この用い方は、宮川氏の見解とは微妙なズレを生じており、白秋が萬葉集歌を手本にした際に若干の曲解があったと思われる。

(竹内史郎)

タワヤ・タワヤニ

桑名

(略)

時になほ街はづれなる老舗の戸

少し明りて火は路へひとすぢ射しぬ。

行燈のかげには清き女の童物縫ふけはひ、

そがなかにたわやの一人髪あげて

戸外すかしぬ。——事もなき夜のしづけさに。

(157ページ)

軟風

(略)

たわやになびく黒髪

君の水脈こそ身に翻れ。

うかびぬ、消えぬ、火の雫、

匂の海のたゆたひに。

(略)

(185ページ)

タワヤは上代において、次のような名詞を形成する。

タワヤガヒナ ……弱細たわや腕を〈多和夜賀比那袁〉……(古

事記、二七、景行天皇)

タワヤメ あはむひのかたみにせよとたわやめ〈多和也女〉

のおもひみだれてぬへるころもそ(万葉集、三七五三)

二音節語基に接尾語ヤがつく語にフハヤ、ナゴヤ、ニコヤがあるがいずれも「―ヤガ下ニ」という形式に用いられており、用法

は既に固定している。

ナゴヤ むしぶすまなごや〈奈胡也〉がしたにふせれどもい

もとしねねばはだしさむしも(万葉集、五二四)

阪倉篤義氏『語構成の研究』(一九七〇、角川書店)は「ヤがさかなな造語力を發揮したのは、おそらくラよりは一つ前の時代であつて、奈良時代においてはその存在はすでに力よいものと指摘されている。タワヤもタワヤ+形式の語は中古以降新たに見られず、他の語と同様に造語力は衰退していたと考えられる。

一方、タワ(タヲ)を語基とする語は中古以降よく用いられる。

タヲヤカ 萩、いと色ふかう、枝たをやかに咲きたるが(枕

草子、六七段)

タヲタヲト 薄紅梅に、御髪いろにて、柳の糸のやうにたを

たをと見ゆ(源氏物語、竹河)

白秋作品にも次のようにタヲを語基とする語が他にみられる。

タワタワ 黄金なす髪もたわたわ、(邪宗門、君)

(小川志乃)

トドロカニ

地平

(略)

しかはあれ、ものなべて圧す

南国の熱病雲ぞ

猥らなる毒の讞言

とどろかに歌かき濁す。

(略)

(68ページ)

トドロの構成はスズロ等と同様に一音節語基重複に接尾辞ロが接続したものであり、トドロカニの構成もスズロカニと同じように「トドロ+カ」+ニであると考えられる。トドロは上代から用例がみられる。

トドロニ かづしかのままのてごながありしかばままのおす
ひになみもとどろに（登村呂尔）（万葉集、三四〇三）

トドロク 轟 トドロク（類聚名義抄観智院本）（トー上、
ドー上濁の声点あり）

トドロト Todoto. トドロト 板敷とか、馬などの通る橋
とかが、音をたてるさま。（日葡辞書）

中世以降、トドロを含む複合語が増加する。馬等の足音が響く
さまを表し、軍記物での使用も目立つ。

トドロカク 中差取テ打番、轟懸テカサヘ打テ廻サントシケ
ルヲ（太平記、巻九）

また、関連する語としてドドメク、ドドメカスがある。

ドドメク Dodomegi, qu, eita. ドドメキ、ドドメク、ドド

メイタ 大騒ぎしてやかましい音をたてる。（日葡辞書）

トドロカニは次の例がみられる。

内大臣ハ善悪ニ付テイトサワガヌ人ニテ、少シ日タケテ、公
達アマタ引具シテ、参リ給ヘリ。トバロカニゾ見ヘ給ヒケル。

（延慶本平家物語、上）

前文との関連が些か不明瞭ではあるが、普段「サワガヌ」内大臣が板敷を踏みしめ、大きな音を立てながら来訪した様子を表しているようである。トドロの語には反復継続性が認められる例が多いが（蜂矢真郷氏『国語重複語の語構成論的研究』「一九九八、塙書房」）、接尾辞カの付与により、この場面では反復継続性は薄れ、内大臣来訪時の情態を客観的に述べているとみられる。白秋におけるトドロカニにも同様の傾向があると考えられる。

（小川志乃）

トログ／トログ

暮春

(略)

はた、大河の饅え濁る、河岸のまぢかを

ぎちぎちと病ましげにとろろぎめぐる

灰色黄ばむ小蒸汽の温るく、まぶしく、

またゆるくとりぎ噴く湯気

いま懈ゆく、

また絶えず。

(略)

(91ページ)

青き光

(略)

かくてなほ悩み顫ふわかき日の薄暮のゆめ。——
見よ、苦き闇の滓街衢には淀みとろげど、
新にもしぶきいづる星の華——泡のなげきに
色青き酒のごと空は、はた、なべて澄みゆく。

(106ページ)

元々トログという動詞は存在しなかった。このトログは、古事記が基となり誤って生まれた動詞である。

古事記上巻に「宇士多加礼許呂々岐豆」(真福寺本)とある。「以音」注により「許呂々岐豆」はコロロキテと読む。伊勢本・春楡本には「許呂々岐豆」と訓がある。ところが、卜部兼永本・前田本・猪熊本では「許呂々岐豆」となり、何らかの事情で「許」の訓がコからトに誤られて伝わっていったようである。また、鼈頭古事記では「斗斗呂岐」であり、そして、本居宣長の訂正古訓古事記では「斗呂岐」となり、万葉仮名も訓「ト」に合わせて「斗」に変わり、「キ」は「ギ」に変わっている(宣長は古事記伝で「岐」を清濁両様と見ている)。

白秋は、宣長以降の本文・訓により古事記に動詞トログがあると考え、古語めいた表現のために使用したものと思われる。

さらに、この動詞の意味も誤って変化したようである。コロロクは、「ころころと鳴る。ころころと音をたてる。」(『時代別国語大辞典上代編』)、「コロコロと転がりうごめいている様子をいう」とり「たい。」(新編日本古典文学全集『古事記』、頭注)と解釈が分かれ

るが、トログとした古事記伝は「斗呂祁豆と云に同じ」としてとろける意としている。白秋もとろける意に用いていると思われる。右に「何らかの事情」と述べたが、コロロクの意味が不明になり、とろける意と理解しようとしたために「許」の訓が発生した可能性が考えられる。

また、白秋にはトログもあり、トログの例と同じ詩にも用いられている。これもとろける意と見られるが、下二段トログと四段トログとの混交によるものかと思われる。

(蜂矢真弓)

ナヨラニ

君

かかる野に
何時かありけむ。
仏手柑の青む南国
薫る日の光なよらに
身をめぐりほめく物の香、
鳥うたひ、
天もゆめみぬ。

(略)

(155ページ)

古代日本語では「ナヨヤカ・ナヨヨカ・ナヨラカ」が見られる。

蜂矢真郷氏「ヤカ型語幹とラカ型語幹」『国語論究7 中古語の研究』(明治書院・一九九八)では、ナヨヨカ(ナヨヤカ・ナヨヨカの、ヤカ・ヨカは母音交替)はナヨ+ヨカの構成の直接型であるとする。さらに氏は、ナヨヤカ・ナヨラカは平安時代の例が見え、ラカ型語幹の交替的代入型や、ヤカ型語幹の交替的代入型形成のように一方から他方への方角を考えるのは困難であり、両形が併存していたと見られるものであると指摘する。以下に例を挙げる。

殊更になよやかにしなし給へる御衣の音なひは(狭衣物語・

四) なよらかにをかしばめる事を好ましからずおぼす人は

(源氏物語・夕霧) なよよかなる直衣、しをれよいほどなるか

いねりの桂(蜻蛉日記・下・天禄三年)

また、白秋に見られる「ナヨラニ」については、次のように推測する。阪倉篤義『語構成の研究』(角川書店・一九六六)では「ラカ」について、「さきにわれわれが一往「ラカ」の例としてあげたものも、別にその「ラ」の形をもつ語の存在するものがおほく、はたして、ラカといふ接尾語による派生語とみとめてよいかなかの判断にまよふものが、実は、おほいのである。」とするように、形容詞語幹などは接尾辞ラを伴うことがあり、「ナヨラカ」も「ナヨラ+カ」と意識されていた可能性がある。

そこで、「ナヨラニ」の近代の詩歌の例を挙げると、次のようである。

砂山の小松の春と青の雪なよらに居寄りむつ語りする(与謝野晶子「太陽と薔薇」『定本與謝野晶子全集』第四巻歌集四・講談社・昭和五五)

また、白秋『邪宗門』には、次のように「ナヨラ+名詞(風)」

「ナヨ+名詞(風)」という形も見られる。

蒸し暑き軟風もの甘き汗に揺れつつ、(青き光)

軟風ゆらにゆらゆる。(大曲『悶絶』)

あはれ、皐月の軟風に／ゆられてゆめむわがおもひ。(軟風) 明けぬれどもものうし。温き土の香を／軟風ゆたにただ懈く揺り吹くなべに、(懶き島)

(岡崎友子)

ヒソニ

顔の印象 六篇

A 精舎

(略)

かくてなほ声もなき秦皮よ、秘に火ともり、
精舎また水晶と凝る時愁やぶれて
響きいづ、響きいづ、最終の霊の梵鐘。

(95ページ)

ヒソニの例は、他に見当たらない。

姦(略 偽也 盗也 私也 野也 比曾加爾 又伊豆波留) (新撰字鏡)

ヒソカニの例は、右のように平安初期から見える。

そして、ヒソニとヒソカニとは、上代・中古に

サヤニ 日の暮れに碓氷の山を越ゆる日は背なのが袖もさやに

振らしつ（佐夜尔布良思都）（万葉三四〇二・東歌）―サヤ
カニ 群鳥の朝立ちいにし君が上はさやかに聞きつ（左夜可
尔伎吉都）思ひしごとく（万葉四四七四）

ノドニ 明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにか
あらまし（能杼尔賀有萬思）（万葉一九七）―ノドカニ 内
弁（新撰字鏡）

ハルニ つのくにのなにはのあしのめもはるにしげきわがこひ
人しるらめや（古今六〇四）―ハルカニ 況 仏教 幽 微
（き）をば（知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点・中田祝夫
氏釈文）

ホノニ なみのうへにはのにみえつつゆくふねはうらふく風ぞ
しるべなりける（躬恒集三一五）―ホノカニ 聊注（側聞）
（側聞）（靈異記・上序・興福寺本訓釈）

などのように対応するものがかなり見えるので、ヒソカニの例があ
ればヒソニの例もあり得るととらえて形成されると見ることができ
ようか。

また、トを伴ったヒソトの例は、
「憂し共思はぬ」、云捨てゝ、ひそとして有所也（申樂談義・能
を書くに）

などに見える。

右に挙げたホノニに対するホノトの例も、
嵐に散れる木の葉も、陽氣を得て、またほのと芽立ち（咄・鹿
の巻筆・秋）

のように見えて、このような二とトとの対応も、ヒソニの形成
に影響する可能性があるう。

ヒビラゲ

（蜂矢真郷）

鉛の室

（略）

油じむ末黒の文字のいくつらね
悲しともなく誦しゆけど、響らぐ声は
鏽びてゆく鉛の悔、しかすがに、
（略）

（136ページ）

ヒビク …垣下に植ゑし椒 口ひくく（久知比々久）…（記神

武・一二）

ヒヒラク「疼」疼（略）痛也 痺也 比々良久 又加由之（新撰字鏡） 諸（の）虐

ク病を成すこと、（東大寺図書館蔵地藏十輪經元慶七年点・
中田祝夫氏釈文）

ひりひりする意のヒビクに対して、同様の意のヒヒラク「疼」が
ある。ヒヒラギ「疼」「比々羅木之八尋矛（比々羅）」（記景行）も、その
葉にふれるとひりひりする木として、ヒヒラク「疼」とともにとら
えられる。中世末に下ると、

ヒイラグ Firagui, u, ida. 傷口や火傷などがぴりぴりする、
または、ずきずきと痛む。上（Camí）では Firagu（疼く）
と言う。（日葡辞書）・ヒイラク 傷口とか火傷などがずきず

きと痛む、または、びりびりとする。(同・補遺)

と、ハ行転呼音化、ア行イとワ行牛の統合の上に、その末尾が濁音化した「グ」の例が(「ク」の例とともに)見られるようになる。また、

ヒビラク Fibiragi, u. 1, fibiragi itami, u. 傷が火で焼くように痛む、または、痛んでびりびりする。(日葡辞書)と、ヒビラクの形も見られる。

その論理でいくと、ヒビクーヒビラクーヒビラグと同様に、ヒビク「響」「大きに梵^ナリ響^ビキ震^{フル}フ雷と音との如し。」(西大寺蔵金光明最勝王經平安初期点・春日政治氏釈文)・「應^{ヒビク}」(平上)「(名義抄・觀法中九九)に対して、ヒビラク「響」という形態が想定されて、それが「ク」から「グ」に濁音化したヒビラグ「響」が形成されるということになる。

ヒビラグは、ビ・グと濁音を二つ持っている。濁音共存忌避の法則(山口佳紀氏「古代語の複合語に関する一考察——連濁をめぐつて——」(「日本語学」七―五「一九八八・五」)参照)により、この形態は本来ありにくいものであるが、時代が下って近世初期の源氏清濁には「あざやぎ」「そびやぎ」の例が見られるので、この頃以降にはその形もあり得るようである。

(蜂矢真弓)

ヒヤシ

顔の印象 六篇

A 精舎

(略)

かかる間^まも、底^{そこ}ふかく青^{あを}の魚^{うめ}盲^{めし}ひあぎとひ、口そそぐ夢^{ゆめ}の豹^{ひょう}水の面^{おもて}に血^ち音^{おと}たてつつ、みな冷^ひやき石^{いし}の世^よと化^なりぞゆく、あな恐怖^{おそれ}より。

(略)

E 不調子

(略)

はた思^{おも}ふ、晩^{おそ}夏^{なつ}の生^{なま}あつきにはひのなかに、倦^うみしごと縋^{もつ}れ入^いるいと冷^ひやき風^{かぜ}の吐^と息^{いき}を。新^{しん}開^{かい}の街^{まち}は鑄^さびて、色^{いろ}赤^{あか}く猥^{みだ}るる屋^や根^ねを、濁^しりたる看^{かん}板^{ばん}を、入^いり残^{のこ}る窓^{まど}の落^お日^{りひ}を。

(略)

(95・99ページ)

ヒヤシの語幹ヒヤは、古くは接尾辞を伴ってあるいは重複して形容動詞語幹として用いられる。名詞に上位して複合語の前項として用いられる例はやや時代が下るようである。

うちそそく秋^{あき}のむらさめひやかにて風^{かぜ}にさきたつしたの浮^う雲^{くも}
(藤原定家・拾遺愚草三二六二)

あつく、ひややかなる物をおどろきて、御^ごむねやませ給^{たま}(宇津保物語・国譲中)

この柿^{かき}のひやひやとしてあたるをかいさぐるに…(古今著聞集)

冷麵 (塵芥)

ヒヤシの例は時代が下り、また用例も少ない。

Fr̄yāi. ヒヤイ (冷い) 冷たい (こと)、または、寒い。下

(X.) の語。(日葡辞書)

ひやき事氷の如く也 (身自鏡・三八歳条 / 『中国史料集』 戦国史料叢書第二期第七 人物往来社 一九六六)

日葡辞書に「下の語」(九州方言) とあるが、毛利家臣玉木吉保の自叙伝である身自鏡(一六一七年成立)の例を考えると、必ずしも九州方言とはいえないであろう。

ヒヤシについて、形容動詞の形容詞化と考えるとヒヤケシ・ヒヤヤケシあるいはヒヤカイ・ヒヤヤカイのように、形容動詞語幹全体が形容詞語幹に取り込まれる形が期待される。よって『角川古語大辞典』の指摘するように、動詞ヒユが形容詞化したものと捉えるほうが適当であろう。下二段動詞が形容詞を派生する場合、アルーアラシ、アスーアサシ、クルークラシのように語幹末はア列音を取ることが多いことは、釘貫享氏の指摘にある通りである(『古代日本語の形態変化』和泉書院 一九九六)。

一方で、ヒヤはカ・ヤカを伴い形容動詞語幹となったり、名詞に上位して複合語を構成したりするなど、形容詞語幹とよく似た振る舞いをする。ヒヤが接尾辞カ・ヤカに対して独立であることからヒヤという形状言を想定し、ヒヤシを形状言ヒヤの形容詞形として捉えることも可能と思われる。

(林 浩恵)

ヒヤム

噴水の印象

(略)

噴水の甘きしたたり。――

そがもとに瘵つける女神の瞳。

はた、赤き眩暈の中、

冷み入る

銀の節、雲のとどろき。

(略)

(93 ページ)

盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光

盲ひし沼にふりそそぎ、濁の水の

声もなく傷き眩む生おびえ。

鉄の匂のひと冷み沁みは入れども、

影うつす煙草工場の煉瓦壁。

眼も痛ましき香のけぶり、機械とどろく。

(略)

(102 ページ)

吊橋のにほひ

(略)

銀色ぎんいろの光のなかに、

そろひゆくオオル櫓うしのなげきしらしらと、

或あるひはほの灰の水鳥みづとりのそこしなもなき音ねのうれひ、

河岸かしの氷室ひむろの壁かも、はた、ただに真昼まひるの

白蠟はくろうの冷ひやみの沈黙しじま。

(略)

(120ページ)

ヒヤムは、ロドリゲス日本大文典に例がある。

Fiyai (冷い)・Fiyē, uru (冷え、ゆる)・Fiyaxi, su (冷やし、す)・Fiyame, uru (冷やめ、むる)。

けれども、この例は下二段活用で冷やす意の他動詞であつて、冷える意の自動詞である白秋の例とは異なる。

ところで、形容詞ヒヤイは、右の日本大文典にも見られ、次のように日葡辞書にも「下」(九州)の語として見られる。

Fiyai. ヒヤイ (冷い) 冷たい (こと)、または、寒い。下

(X.) の語。／Fiyasa. (冷さ)／Fiyō. (冷う)

形容詞語幹が接尾辞ムを伴い四段・下二段動詞を構成することは普通に見られることで、

イタシ 葦原中國者 伊多玖佐夜藝帝阿理那理此十一字以音(記神武)――

イタム「四段」恒(略) 辭恒而憂也 惜恒也 伊太弥奈介久(新撰字鏡)――イタム

「下二段」 松浦太郎重俊承て、足手をはさみ、さまぐにいためとふ(寛一本平家物語)

ヤスシ ……下泣したなきに我が泣なく妻つまを今夜こそこそは安やすく肌触はだかれ(夜須

久波陀布礼)(記允恭・七八)――ヤスム「四段」 令しな二咒護しな 猶

不ふ二愈差しな (愈な夜須類) ……乞こ飯い而者 差さ病起居やま(差さ夜須類) (靈異記・下

卅六・真福寺本)――ヤスム「下二段」 ……泣なく子こなす慕したひ来きま

して息いきだにもいまだ休やすめず(伊摩陀夜周米受) ……(万葉七九

四)

などのである。つまり、形容詞ヒヤイが四段動詞を構成したものが白秋の例であり、下二段動詞を構成したものが日本大文典の例であることになる。

白秋「噴水の印象」のヒヤムの例について、『日本国語大辞典』第二版は「活用の種類は明らかでない。」としている。四段活用か上二段活用かが「明らかでない」との意と考えられる。しかし、形容詞語幹が接尾辞ブを伴うものは基本的に上二段活用であるのに対して、接尾辞ムを伴うものは右に挙げたように四段・下二段活用であるので、白秋のヒヤムは四段活用と考えてよいと思われる。

(蜂矢真弓)

フクラニ

顔の印象 六篇

D 沈丁花

(略)

響かふは呪はしき執と欲、ゆめもふくらに
頸巻く毛のぬくみ、真白なるほだしの環
そがうへに我ぞ聴く、沈丁花たぎる烟を、
堪へがたき夏の日を、狂ほしき甘きひびきを。

(略)

(98ページ)

フクラおよびフクラニの早い時期の例は、次のものが挙げられる。

・隆ハタカシトヨムソ。高ノ心ソ。サカンナリトモヨムソ。冬ノ

ノマン中フクラノ心ソ。(玉塵抄・五)

・秋風のふくらに入てのむ酒をみにしむばかり酔にける哉(狂歌

・狂歌酒百首)

邪宗門の例も含め、これらの語は、次の古俳諧にまつわる辞書で

ある反故集(一六九六年)に

・豊 最中之意(反故集・卷下)

とあることからわかるように、「最中」「真つ直中」というような意味であろう。

ところで、邪宗門では、「ゆめも」という成分がフクラニに係り、「ゆめもふくらに」とあるが、この「XモYニ」という表現の類型は古く萬葉集において盛んに使用されている。

・近江の海夕波千鳥汝が鳴けば心もしのに(情毛思努尔)古思ほ
ゆ(萬葉集・二六六)

・伊勢の海の磯もとどろに(磯毛動尔)寄する波恐き人に恋ひ渡
るかも(萬葉集・六〇〇)

・秋萩の枝もとををに(枝毛十尾二)置く露の消なば消ぬとも色
に出でめやも(萬葉集・一五九五)

・草香の山を夕暮に我が越え来れば山も狭に(山毛世尔)咲ける
あしびの悪しからぬ君をいつしか行きてはや見む(萬葉集・一
四二八)

萬葉集盛んであった表現の類型を白秋が手本として取り込んだのは、間違いないところであろう。

(竹内史郎)

マロガル

狂へる椿

(略)

なべて悩まし。

溶けゆく雲のまろがり、

大ぞらのにほひも、ゆめも。

(略)

(116ページ)

日ざかり

(略)

油うく線路の正面、

鉄重き橋の構にてつおも かまへ

雲ひとつまろがりいでて

くらくらとかがやく真昼まひる、

汗あせながし、車曳ひきつつ

匍匐はふがごと撒水みづまき夫きたる。

(184ページ)

混沌万呂加礼多留古止 (御巫本日本書紀私記)

右のマロカルマロカルの例は、日本書紀の冒頭の「古天地未レ剖 陰陽不レ分 混沌如ニ鶏子ニ溟滓而含レ牙」の「混沌」の部分に対する訓を示したものである。他に、

まろかれたる御額ひたひがみ髪、ひきつくるひ給へど (源氏物語・朝顔)

大指ノ大許サナル物ノ黄黒バミタルガ、…打丸カレテ入タリ (今昔物語集・三

十一)

などの例もある。

自動詞マロカルに対する他動詞マロカスの例は、

團團(略) 川麻呂加須川(略) (新訳華嚴經音義私記)

のようで、丸くする意と見られるので、マロカルは丸くなる意が本来で、それが日本書紀私記では一つに混じり合う意に用いられていると考えられる。

また、マロカスは、「搏マロカシ」(名義抄・観仏下本七一)のように清音力であるので、マロカルも清音力と思われる。

転がる意のマロガルはマロカルマロカルの力が濁音化したものと思われるが、『日本国語大辞典』第二版はその例として、森鷗外訳「即興詩人」基督の徒(一九〇一年)、石川啄木「あこがれ」黄金幻境(一

九〇五年)の例を挙げていて、白秋の例はそれぞれ一九〇八・一九〇六年の作であるのでそれらより少し遅れている。

白秋の「日ざかり」の例は「まろがりいでて」とあるので転がる意に用いられているようであるが、「狂へる椿」の例はむしろ丸くなる意に用いられているとも考えられる。

(蜂矢真弓)

マロラニ

夕日のにほひ

(略)

あはれ、見よ、

いろいろのかがやきに濡ぬれもしめりて
円まるらにもものぼりゆく大おほきなるひとつの珠たまよ。

そをいまし見あげたる無心むしんの瞳ひとみ。

(略)

(111ページ)

マロラニないしマロラナリについては、邪宗門以前の例を見出すことができない。一方で、邪宗門と時期の近い例として次のものがある。

・みほとけの肱まろらなるやははだのあせむすまでにしげる山かな (会津八一『南京新唱』「一九二四年」)

定かではないものの、この例は邪宗門より二〇年ほど下っており、

その影響下にある可能性がある。なお管見では歴史上で初出とされる邪宗門のマロラニの造語事情は、以下のように考えられる。

次に示すように、古くはマロラカという語形が存していた。

・かひなをさしいでたるがまろらかにをかしげなる程も：（源氏物語・宿木）

・白縫は女使等とゝもに、團らかに立こみて、そのいふ所を聞。

（椿説弓張月・上）

このマロラカという語は、蜂矢真郷氏「ラカ型語幹の構成」（『森重先生喜寿記念 ことばとことのは』和泉書院、一九九九年）によれば、形容詞語幹を構成要素とする本来型のラカ型語幹と考えられる。すなわち、前項要素であるマロは形容詞語幹と見られ、「マロラカ」と分析できる。

そして、次のような例も考慮しよう。

・立てる人どもは、装束の清らなること、物にも似ず（竹取物語）

・…小金門にも悲しらに（物悲良尔）思へりし我が子の刀自を
：（萬葉集・七二三）

これらは、形容詞語幹キヨ・カナシが接辞ラを伴う例であり、これらに代表されるように接辞ラは一般に形容詞語幹に伴われる。

以上から、形容詞語幹が接辞ラを一般に伴う現象を背景に、既存のマロラカの力の脱落形としてマロラなる語を白秋は生み出したと考えられる。おわかりように、マロラニの造語事情はオホラニのそれと同じである。

（竹内史郎）

ミダラカニ

黒 船

（略）

黒煙三すぢ、五すぢ。――
幻法のこれや苦しき脅迫
いと淫らかに蒸し挑む疾風のもとに、
現れて真黒に歎く楽の船、
生あをじろき饞の腹ただほのぼのと、
暮れがての赤きくるしみ、うめきごゑ、
血の甲板のうへにまた爛れて叫ぶ
楽慾の破片の砲弾ぞ慄ける。
ああその空にはたためく黒き帆のかげ。

（略）

（65ページ）

古代日本語について阪倉篤義氏は『語構成の研究』（一九六六、角川書店）において「古代日本語の名詞には（中略）、今ひとつ（むしろ未然形と関連づけ得るような）a接尾による情態性の意味をもった語が多数存在した」と指摘される。

ミタリ 弥太利加波志 弥太利己止 又左和加波志 又左比々
々之（新撰字鏡）

平安初期には右のように四段活用のみダルがあつたと見られ、未然形相当のみダラは形成可能であつたと考えられるが、上代資

料において単独で名詞としての使用、および、ミダラ―形式による動詞、名詞などは確認できない。

しかし、平安時代にはカス型動詞として次の例も確認できる。

ミダラカス 我が心をみだらかし人にも心おかれなげかせじ
と（浜松中納言物語）

また、中世にはミダラスも使用されるようになる。

ミダラス Midaraxi, su, aita. (ミダラシ、ス、イタ) 紛糾させる。(以下略) (日葡辞書)

（この間のカス型動詞の形成過程等については、蜂矢真郷氏「カス型動詞の構成」(『吉井巖先生古稀記念論集 日本古典の眺望』「一九九一、桜楓社」に詳しい。) 江戸時代以降、形容動詞ミダラナリも成立し、形容動詞の他に名詞ミダラの例も見られる。

心もみだらに身をもちくづし人にも人といはれぬ。(近松門左衛門、生玉心中)

たとへあなたと御寝になつても猥らのないのは知れてある。

(柳亭種彦、修紫田舎源氏)

右に述べたことから、ミダラカニの構成は「ミダラ+カ」十二であると思われる。

(小川志乃)

ヤハラニ

月の出

(略)

吐息のをのき、君が眼ざし

やはらに縛れてたゆたふとき、

光のひとすぢ――顫ふ白楊

文月の香炉に濡れてけぶる。

(略)

(84ページ)

浴室

(略)

水落つ、たと……たとあな音色柔らに、

大理石の苦悩に湯気は濃く、温るく、

鈍きどよみと外光のなまめく靄に

疲れゆく赤き都会のらうたげさ、太鼓ぞ鳴れる。

(113ページ)

内陣

(略)

だらりの姿おぼろかになまめき薫ゆる舞姫の

ほのかに今したたずめば、本尊仏のうすあかり

静かなること水のごと沈みて匂ふ香のそらに、

仰ぐともなき目見のゆめ、やはらに涙さそふ時。

邪宗門より遡る例に次のものがある。

・海原の根柔ら小菅（根夜波良古須氣）あまたあれば君は忘らす
我忘るれや（萬葉集・三四九八）

また、ヤハラデという語形で、副詞的にはたらいっている例も見出せる。

・かさにかゝれば「アア、これく。我々は女のたびだち。よるのみちゆへ身のようにじん。なんにも覚はないはいなふ」と。やはらでかかれどこはばるしもべ。（浄瑠璃・狭夜衣鴛鴦劍翹）

・わたしが和らで物を申すうちお返しなさるが、あなたのお為でござりませうぞえ（歌舞伎・東海道四谷怪談 四幕）

ヤハラデとヤハラニの関係は、当時代的な語形のあり方を示しているのが前者で、擬古的な語形のあり方を示しているのが後者といえようか。白秋の時代より古くからヤハラという語形が存在しており、そのヤハラに二語尾を付して、邪宗門に見えるヤハラニは生み出されたと説明できるかもしれない。

しかしここでは、もう一つの可能性を示してみたい。

一八世紀の文献に、ヤワイという形容詞がある。

・熟鯨 ユテアワヒヲ ヨクニテサシヤレイ ヤワイホトヨフゴザル（交隣須知・卷二十七丁）

また、次に示すように接辞ラは一般に形容詞語幹に伴う。

・…小金門にもの悲しらに（物悲良尔）思へりし我が子の刀自を
…（萬葉集・七二三）

・立てる人どもは、装束の清らなること、物にも似ず（竹取物語）

だとすれば、ヤハイの語幹に接辞ラが下接してヤハラという語形が生じたという説明も成り立つ。白秋が『邪宗門』においてヤハイという形容詞を使用していることも付け加えておく。

・ものあたたかに、くるほしく、やはく、まぶしく、蒸し淀む夕日の光。（『邪宗門』外光と印象 暮春）

（竹内史郎）

ユメム

暮春

（略）

いま病院の裏庭に、煉瓦のもとに、
白楊のしどろもどろの香のかげに、
窓の硝子に、

まじまじと日向求むる病人は目も悩ましく

見ぞ夢む、暮春の空と、もののねと、
水と、にほひと。

（略）

（91ページ）

軟風

(略)

同じ音色の揺曳に

倦じぬ、かくて君が目も。――

あはれ、皐月の軟風に

ゆられてゆめむわがおもひ。

(185ページ)

上二段動詞↓上一段動詞の変化については、橋本進吉氏「上代に於ける波行上一段活用について」(『上代語の研究』「一九五一・一〇岩波書店」)・有坂秀世氏「古動詞「みる」(廻・転)について」(『国語音韻史の研究』「一九五七・一〇増補新版三省堂」)の研究がある。上代・中古において、上二段↓上一段に変化したものにフ「乾・干」 兄曰三市乾鹿文(義記)(景行紀十二年十二月) ↓ヒル あしひきの山べに今はすみぞめの衣の袖はひる時もなし

(古今八四四)

アラブ「荒」 荒夫琉神等(夫琉二)(記神代) ↓アラビル 此乃心惡

子乃心荒(比留) (祝詞・鎮火祭)

ウ「居」 仰見而悔之急居(急居比云) (崇神紀十年九月) ↓ユル 琴(こと)

頭(がみ)に来居(きゐ)る影姫(かげひめ) (枳(あ)謂(い)屢(る)箇(こ)皚(あ)必(ひつ)謎(めい)) 玉(たま)ならば吾(あ)が欲(ほ)る玉(たま)の鰻(うなぎ)白(しろ)

玉(たま) (武烈紀・九二)

があり(他に、フ「噓」 ↓ヒル、フ「簸」 ↓ヒル、ム「廻」 ↓ミルがある)、反対に上一段↓上二段に変化したものに

イサチル 何由(ゆ)以(もつ)(略) 哭伊佐知流(記神代) ↓イサツ 兵

粮既(に)盡(こ)憂(う)泣(な) 茲(こ)深(こ)。(雄略紀二十年・前田本)

がある。川端善明氏『活用の研究』Ⅱ「一九七九・二大修館書店」第二章第二節は、一音節語幹のものは上二段↓上一段の傾向があるのに対して、(アラブを別にして)多音節語幹のものは上一段↓上二段の傾向があるとして、イサツの他に

カイマム さてかいまめば、我にはよくてみえしかど(大和物語) ↑カイマミル

ココロム 試(こころ)ミル (色葉字類抄) ↑ココロミル

などを挙げている。多音節語幹で上一段↓上二段のものは、ミル↓ム(ミル)のものがやや多く、ユメミル↓ユメムもこの傾向に沿ったものと思われる。

なお、『日本国語大辞典』第二版は、国木田独步「わかれ」(一八九八年)、尾崎紅葉「続々金色夜叉」(一八九九〜一九〇二年)などのユメムの例を挙げていて、白秋の例(一九〇八・一九〇七年)が最も古い訳ではない。

(蜂矢真弓)

ユラユル

夢の奥

薄暮(たそがれ)にせきもあへぬ女の吐息(いき)

あはれその愁(うれひ)如(ごと)し、しぶく噴水(ふきあげ)

そことなう節(ふし)ゆるうゆらゆるなべに、

いつしかとほのめきぬ月の光も。

その空に、その苑(その)に、ほのの青みに

静かなる歔^{すすりなき}泣きもいでつつ、
いづくにか、さまだるる愛慕^{あいぼ}のなげき。

(略)

(44ページ)

ほのかにひとつ

(略)

やはらかき麦生^{むぎふ}のなかに、
軟風^{なよかせ}のゆらゆるそのに。

(略)

やはらかき麦生^{むぎふ}の靄^{もろ}に、
軟風^{なよかせ}のゆらゆる胸に、

(略)

(58・59ページ)

大曲『悶絶』

(略)

しづかなる皐月^{さつき}の真昼、
白雲はゆるかにのぼり、
軟^{なよ}ら風ゆらにゆらゆる。

(略)

(236ページ)

「ゆらゆ」(自動ヤ下二)は中世から見られる語であり『日葡辞書』に以下の記述が見られる。

Yuraye, uru, eta. ユラエ、ユル、エタ(揺らえ、ゆる、えた)物が波の上などを漂っている。『比喩。Yurayete iru(揺らえてゐる)ある物が、甲の方へも乙の方へも行かないで、或る所にとどまっている。』(邦訳日葡辞書)岩波書店)

その他の中世の例を挙げると、次のようである。

弓のはずにて鎌田が甲の鉢をちやうどつく。つかれてゆらゆる間に、胄をと(つ)てうちきつゝ、『平治物語』(古活字本)日本古典文学大系、金刀比羅宮本では「弓のはぎにて鎌田がはちをちやうどつかれて、少しひるむところに、かぶと引よせ打着て」とあり、この「ゆらゆる間」は「ひるんでいる間に」と解釈できる)

命ヲ風塵ヨリモ輕シテ防ギ戦ケル程ニ、寄手ノ大勢進兼テ、四明ノ巔・西谷口、今三町許ニ向上テ一氣休テゾユラヘケル。

『太平記二』日本古典文学大系(ためらっていた)

このように、「ゆらゆ」は、中世では「(何か物が)揺れ動く」と「(とまどいから動きを)ためらう・ひるむ」意とに用いられている。

なお、近代においては白秋と同じく「揺れている」等の意の例が見られる。以下に例を挙げておく。

「ああ大和にしあらましかば」

(略) 平群^{へぐり}のおほ野^の、高草^{たかくさ}の黄金^{こがね}の海^{うみ}とゆらゆる日^ひ、塵居^{ちりゐ}の窓^{まど}

のうは白^{しろ}み日^ひざしの淡^{あは}に、いにし代^よの珍^{うづ}の御^み經^{きやう}の黄金^{こがね}文字^{もじ}、

(略)『白羊宮』薄田泣菫、金尾文淵堂版、名著復刻全集近代文学館昭和43年、財団法人・日本近代文学館)

「春の思ひ出」

(略)

古き代の富^やみし館^{かた}の

カドリール ゆらゆるスカート

カドリール ゆらゆるスカート

何時の日か絶えんとはする カドリール!

『中原中也』近代の詩人十、加藤周一編、潮出版社)

(岡崎友子)

ユルカニ

序 楽

(略)

あはれ、見よ、そのかみの苦^{なや}悩^みむなしく

壁^まはいたみ、円柱^{まろはしら}熔^とけくづれて

朽^くちはてし熔岩^{ラザア}に埋^{うも}るポンペイを、わが幻^{まぼろし}を。

ひとびとはいましゆるかに絃^{いと}の弓、

はた、もろもろの調^{てう}楽^{がく}の器^{うつは}をぞ執^とる。

(略)

(54ページ)

大曲『悶絶』

(略)

しづかなる皐^さ月^{つき}の真昼、

白雲はゆるかにのぼり、

軟^{なや}ら風ゆらにゆらゆる。

(略)

(236ページ)

ユルカニは『類聚名義抄』に用例が見られる。

奢 ユルカニ

奢 ユル、カニ(以上、類聚名義抄観智院本)

上代・中古以降ユルルカ・ユルラカの例が多数見られる。また、中世以降、ユルヤカの例も見られるようになる。

ユルルカ 心にもしめたまはざりしほどに別れたてまつりたまひにしかば、ゆるるかにも弾きとりたまはで(源氏物語、若菜下)

ユルラカ 「白虹日を貫けり。太子畏ぢたり」と、いとゆるらかにうち誦したるを(源氏物語、賢木)

一方、ユルカニの用例は非常に少ない。

真木の戸を明くれば春やいそぐらん袂にさえし風ゆるかなり(夫木和歌抄、七一)

蜂矢真郷氏「カ型語幹の構成」『国語語彙史の研究』一七「一九九八、和泉書院」において、ユルカニは形容詞ユルシからケ

シ型語幹ユルケシが二次的に形成され、カ型語幹とケシ型形容詞との対応から類推によって形成されたと指摘される。

近代において、ユルカニは次のように用いられている。

葵かづらの冠して、近衛使の神まつり、／塗の轅の牛車、ゆるかにすべる御生の日、（薄田泣菫『白羊宮』望郷の歌、「一

九〇六〔明治三九年〕金尾文淵堂、薄田泣菫全集二、創元

社）

四五本の芒の穂がゆるかに揺れて（長塚節『鉛筆日抄』「一

九〇七〔明治四〇年〕『馬酔木』第四卷第一号・第二号、長塚節全集二、春陽堂書店）

これらの例が前時代からの継続かどうかは明らかではない。しかし、新たな造語であるとすれば、これらの作家にユルカの形成を促す共通認識の存在を伺わせる。例えば、使用例の多い、ノドヤカーノドカ、コマヤカーコマカの対応との類推によってユルヤカからの形成とも考えられるが、なお検討を要するだろう。

（小川志乃）